

わが国の漁業の生産構造は生産力の低い沿岸漁家を基底とし、個人経営の中小経営を中核に、巨大資本の会社経営を上層として構成されており、資本的経営のいまだみられない農業と異なる特殊性をもっている。

周囲を海にかこまれ、孤立した島国で大陸にみられるような牧畜業の発展が殆んどなかったわが国においては、沿岸漁業はまさに庶民生活に動物性食料資源を提供する産業としての重要性をもっていた。

しかし、現在は漁業生産力の主たる担い手ではありえないにもかかわらず、はるかに生産力水準の高い大規模な中小漁業資本および大漁業資本と競合しながら広汎に存在している漁家（10トン未満層）の消費生活を漁家経済調査における生活費分析を通してみようと思う。

生活は何といっても、生産に規定されるので、漁家の生産力が漁船の動力化、大型化により生産所得の逐次増加もみられ、生活水準の上昇もあきらかである。しかし、漁家の生活は漁業専門度が低く、農業との結合が強く、賃労働従事者も多い多種兼業形態が多だけに、多くの問題をもっている。